



星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2012年11月02日

星からの視線を感じた賢治の心 (1)～(5)

(1)

吉田源治郎著『肉眼に見える星の研究』（1922年、警醒社）を中心として、星に関する最新の知識を得た賢治は、それらをうまく使いながら数々の作品をつくりあげていった。代表作である「銀河鉄道の夜」も、そのひとつである。

しかし、以前にも紹介したように、明るい一等星クラスの星を、目と表現する点については賢治のオリジナルな着想である。夜空に輝く星から自分が見つめられている、あるいは視線を感じるという感覚は、賢治の内的な一面を示している、といえるだろう。

私にも経験があるので、よくわかるのだが、漆黒の闇に光輝く星を見ている自分が、実はわれわれの人知を越えた何か（それを神と表現してもよいかもしれない）から、逆に見つめられている、という感覚になることがある。自分自身の存在や、その生きている意味といった、どちらかといえば哲学的な思いにふけるような時、それはしばしば太陽の光に満ちた昼ではなく、皆が寝静まった夜のことが多い。そして、夜には星が輝いているのである。その星の光を見つめながら、自分自身について考え込むのである。こうした経験は思春期あるいは青春時代に誰もが経験するのではないだろうか。

賢治も、まちがいなく同じような状況で星を見つめていたことは確かである。幼少期から、飢饉のために実家の質店に通う貧しい農家の人たちを見てきた。その経験から、自分はそういった貧しい人たちのため、あるいは社会のために何ができるかを真剣に考えるようになった。もともと実父は、浄土真宗の信仰があつく、下地はあったと思われるが、盛岡中学を卒業した頃に『妙法蓮華経』を読んで感動し、盛岡高等農林学校に進学してからの法華経へ傾倒していく。これこそが「ほんとうにみ



(2)

思春期の賢治は、「ほんとうにみんなの幸（さいわい）のため」（※）に自分自身が進むべき道として、法華経を、そしてその教えを広めつつあった宗教団体「国柱会」へと傾倒していく。これには賢治の実家が、法華経とは系統の異なる宗派である浄土真宗の信仰が篤かったことが、いい意味でも悪い意味でも大きく影響していた。賢治の父は、自ら仏教会を主催し、賢治を連れて行ったりしていたようである。また、日常のように聞かされていた「正信偈（しょうしんげ）」や「白骨御文章」は暗唱できてしまうほどであったといわれる。こうした家庭環境は、おそらく宗教への理解の下地を作ったに違いない。

一方、その当時の飢饉や災害による農家の危機的状況や、困窮した人々を相手にせざるを得ない実家の生業、信仰とは一見裏腹に見える質屋という生業への反発は、賢治をして別の新しい信仰へ傾倒させていく要因となった。こうして、賢治は突然家出をする形で上京し、「国柱会」の門をたたくことになる。大正9年、賢治24歳の時である。

このような思春期の篤い志は、しばしば冷静に考えると、あまりに突飛すぎて、社会的な常識とはかけ離れてしまい、簡単には受け入れられないことも多い。実際、国柱会の玄関で、賢治はいきなり「どうか下足番でもピラ張りでも何でもしますからこちらでお使ひくださいますまいか」と頼み込んだ。しかし、家出同然の青年をいきなり受け入れるわけにもいかない。門前払いをくらう形で、落ち着き先と仕事を探すことになる。

冬の寒風吹きすさぶ東京の町をさまよいながら、その夜空に輝く星々を、賢治はいったいどんな思いで見上げていただろうか。

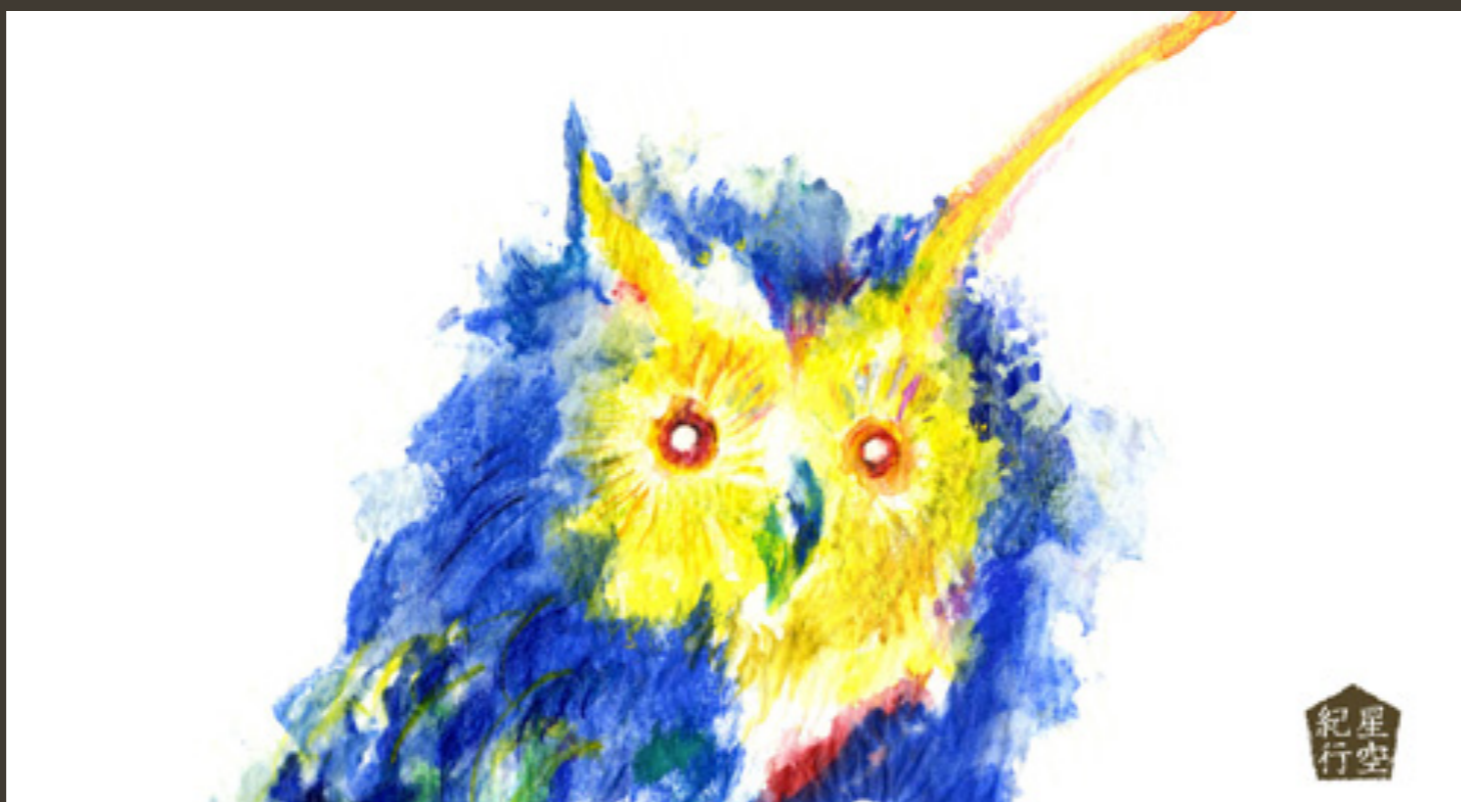


(3)

突然の家出・上京。そして国柱会の門を叩いた賢治は、なかば門前払いとなる形で、寒風吹きすさぶ東京の町をさまよひ、住まいと仕事を探すことになる。察するに、賢治は最初から国柱会に住み込めると思い込んでいて、あまり持ち合わせもなかった。そこで、日本橋の書店に走り、予約してあった本をキャンセルして、当座のお金を工面したようだ。その意味では、周到な計画のもとに取った行動ではなかった。いずれにしろ、一時路頭に迷うような境遇となった賢治。東京の夜空に冷たく輝く星々を見上げたに違いない。そんな時、自分を見つめているような星たちの「瞳」を感じたのではないか、と思う。このとき、賢治は25歳。法華経を通して皆の幸いを実現するという、熱い思いがにじみ出た行動といえるだろう。

その後、東京帝大前の小さな印刷所での仕事を得た賢治は、志どおりに国柱会にも出入りするようになり、ここで賢治の創作に大きな影響を与える人物に出会う。国柱会の高知尾智耀（たかちおちよう）である。彼は、法華文学という概念を考えており、賢治の才を見抜いてのことか、ペンで信仰を広めるべく勧めたのである。この頃から賢治の創作活動は、短編童話や説話系の小説へと傾いていくことになる。「電車」「床屋」といった短編や、「かしわばやしの夜」などは、この時期に執筆されたものである。

だが、一年経たないうちに、賢治は書きかけの原稿をトランクに詰めこんで、何の未練も無いように郷里に帰ることになる。最愛の妹であるトシが病気となったことが、直接のきっかけであった。しかし、これは表向きの理由であったようだ。最近、明らかになった賢治の手紙の分析から、もうひとつの理由が見えてきた。それは賢治の熱意を一気に冷ましてしまうような、事件と言ってもいい出来事であった。



「かしわばやしの夜」から

(4)

実は、賢治には「同じ道を歩もう」と約束をした友がいた。以前にも紹介したが、盛岡高等農林学校の学生寮で同室だった保阪嘉内（1896—1937）である。

彼は、もともと山梨の出身で、甲府中学校(現甲府第一高等学校)を卒業後に盛岡高等農林学校(現岩手大学農学部)に進んだ。演劇、文芸や宗教などにも造詣が深く、たちまち賢治と意気投合したようである。学内で文芸同人誌「アザリア」を賢治と一緒に創刊し、夜ごとに様々なことを語り合う仲になったのだろう。賢治は、彼こそ共に「みなのかげを實現するために」一緒に行動を起こしてくれる人物だ、と思うようになっていった。もちろん、保阪嘉内も、当時はそう思っていたのかもしれない。

だが、その後の環境変化は、思いをそのまま保つには激しすぎた。いや、もともと二十歳前後の青

年のことだ。意気投合したとしても、その頃の意気がそれぞれに時と共に変化してしまうのは当然と言えば当然かも知れない。

嘉内は、彼の筆になるアザリア5号の「社会と自分」が学校当局から危険だとみなされ、除名放校処分となってしまう。これは嘉内にとっても賢治にとっても分かれ道だったのだろう。賢治は嘉内に対しては、あくまで同志であると思い続けた。そして、家出同然で上京した賢治が熱望したのが、嘉内も同じく山梨から出てきて一緒に国柱会に入ってくれることだった。賢治から嘉内にあてた手紙は70通を越えている。その中には「私が友保阪嘉内、私が友保阪嘉内、我を棄てるな」というフレーズさえ現れる。（「宮沢賢治の青春―"ただ一人の友"保阪嘉内をめぐる」菅原 千恵子著）

だが、嘉内の答えはノーであった。こうして失恋に似た精神的打撃を賢治は受けた。上京して半年後、すでに季節は夏になっていた。国柱会から門前払いをくらい、町中をさまよった時とは異なる夏の星たちが、再び彷徨える賢治を見つめていたのである。

(5)

「同じ道を歩もう」と約束をした友、保阪嘉内は、盛岡高等農林学校(現岩手大農学部)から除名放校処分を受け、郷里の山梨に帰り、時を過ごすうちに、いろいろなことを見つめ直していく。相変わらず旧弊な村落から出てみたいと願うのは若さ故であるにしても、長男として、それを実行できない自分に焦ってもいた。賢治と手紙を交わしてきた期間はほぼ3年にわたる。青年時期の三年は長い。日記には、これまで否定し続けてきた家、特に父に対しても、その生き方を次第に認めるようになっていったことが記されている。

家出同然で上京し、3年前と同じ熱意で国柱会への入会を勧めてきた時、すでに嘉内の心は変わっていたといえる。このあたりの保阪嘉内の心の変遷を正確に辿ることはできないが、むしろ、賢治の熱心な勧誘が、宗教者として生きていくことを拒否する引き金になったともいえる。賢治研究者の菅原千恵子は、その著書「宮沢賢治の青春― "ただ一人の友"保阪嘉内をめぐる」の中で、「求められ異体同心と言われれば言われるほどそれに応えきれない苦しさが大きな負担となつてのしかかってきていたのではないか。」と述べている。いずれにしろ、夏のある日、賢治は嘉内と実際に会い、嘉内の心を知って精神的に手ひどく打ちのめされたのである。

確かに、大人になっていくにつれて、子供時代の友人たちが、それまでの関係ではなくなっていくような変化に直面し、それを受けとめざるを得ないときの当惑や寂しさを感じたことは誰しもあるに違いない。私自身も似た経験がある。小学校から中学へと進学するときに、福島県の会津から浜通りのいわき市へ転校した。友人が一人もいない寂しさを感じつつ、新しい友人もなかなかできず、会津の友だちがとてもよく思えた。1年半後、再び父の転勤を機に、会津の同じ中学校区に帰ることになった。喜び勇んで、幼なじみの友人たちのいる学校に転校したが、昔の友人たちは少し大人になり、小学校時代のイメージとは違って、逆に寂しく思ったことがある。賢治の友人、特に嘉内への思い入れは、人生を共にしようとさえ考えるレベルだったので、そのショックは私が感じた寂しさの比ではなかつただろう。私も転校のたびに、寂しさを紛らすために夜空に輝く星たちを見上げていたことを思い出す。

いずれにしろ、こうした賢治の精神的遍歴を考えると、最も遠くにあつて、常に自分の上に輝く星に視線を感じていたのは自然なのかもしれない。